

日本プロテオーム学会 (2026年～2027年理事)
2026年 第一回理事会 議題

開催日時： 2026年1月21日(水) 15:00～18:00

会場： 国立健康・栄養研究所 1階研修展示室

出席者(50音順, 敬称略)：

「新理事」

足立淳、阿部雄一、石濱泰、今見考志、植田幸嗣、太田信哉、大槻純男、川島祐介、川村猛、紀藤圭治、小迫英尊、榊原陽一、杉山直幸、武森信暁、肥後大輔、松本俊英、松本雅記、三城(佐藤)恵美、村岡賢、吉川治孝

「旧理事」

荒川憲昭、岩崎未央、河野信、小寺義男、田中恒平、増田豪

「オブザーバー」

小松節子

Zoom参加者：足達俊吾、川上隆雄、木村弥生、

欠席者：奥田修二郎、小林大樹、近藤格、渡辺栄一郎、野口玲、久野敦

<https://us06web.zoom.us/j/82058624763?pwd=72v3Ilg6nwzxbXSQwWh2K1NfKpxxmmV.1>

1. 会長挨拶(足立淳)

- プロテオーム学会の世代交代に伴い、次の世代で盛り上がるようにサポートしていくのが重要との挨拶があった。

(1) 会員状況(木村)

会員数 (2026年1月18日現在)

種別	会員数
個人会員	個人会員 588名(個人会員:481名, 個人会員(法人登録):107名)(昨年:560名、一昨年:521名)
名誉会員	5名(昨年:4名)
学生会員	288名(192名※1)(昨年:270名、一昨年:380名)
法人会員	15社(昨年13社、一昨年14社)
合計	881名+15社(昨年:834名+13社)

※1 メール不達者除外

- 会員数について、現時点の人数(上記)について報告があった。

2. 会計報告

(1) 現貯蓄額(2025年1月9日現在)(三城)

口座	残額
事務局口座(ゆうちょ銀行)	¥12,409,733
奇数年度大会口座(ゆうちょ銀行)	¥2,791,431
偶数年度大会口座(ゆうちょ銀行)	¥498,627
合計	¥15,699,791

● 会計状況についての説明があり、別途事務局口座としての 500 万円定期預金があることの報告があった（表に記載済み）。今後、奇数年度大会口座には大会準備金 50 万を残し、余り全額を事務局口座へ送金される予定。

(2) その他

助成金（JPDM 国際情報発信強化）(杉山)

科研費助成金口座（三菱UFJ）	¥2,716,624
-----------------	------------

(収入) R7 年度科研費 ¥3,700,000
利息 ¥708

(支出) ¥984,084

項目	金額
「Toward AI-Ready and Beyond」シンポジウム	¥308,343
AUS_oMicS 出張旅費	¥226,761
JPDM 誌 7 巻の編集費	¥198,110
Dropbox ライセンス更新料	¥85,536
バイオハッカソン出張旅費	¥97,090
JPDM-jPOST 合宿	¥31,898
2024 年度メタデータ抽出バイト謝金	¥20,000
販促用グッズ	¥9,614
振込手数料	¥6,732
計	¥984,084

執行予定

JPDM 編集会議（1/21）旅費
人カメタデータ抽出バイト代
J-STAGE 投稿審査料

● 会長交代につき、助成金（JPDM 国際情報発信強化）用の口座も名義変更必要。

3. 承認事項（足立）

(1) 指名理事

松本俊英、村岡賢、榊原陽一

● 足立会長より指名理事について説明があり、承認された

(2) 学会事務局の住所変更

新住所

かずさ DNA 研究所（応用プロテオミクスグループ）

〒292-0818

千葉県木更津市かずさ鎌足 2-5-23

かずさバイオ共同研究開発センター6号室

Tel:0438-52-3580

旧住所

横浜市立大学 先端医科学研究センター（プロテオミクス）内

〒236-0004

神奈川県横浜市金沢区福浦 3-9

TEL: 045-787-2519

- 足立会長より住所変更について説明があり、承認された

4. 規約改定について（足立）

(1) 庶務担当理事を4名にする件を規定改訂

第10条（役員の構成）

会長 1名

副会長 最大2名

庶務担当理事 3名（主1名、副2名）→最大4名（主1名、副3名）

理事 20名～25名

監事 2名

- 足立会長より庶務担当理事を4名に変更したい説明があり、承認された。また規約の中に、“執行部会（会長・副会長・庶務担当）”の定義があるため、その部分と今回の変更との齟齬が無いよう確認する指摘があった。さらに過去の規約も継承されているか、確認するよう指摘があった。→人数変更について、上記以外の規約を変更する必要がないことを確認した。

5. 理事役割分担について（足立）

(1) 今期の役割分担

① 副会長の互選

- 足立会長より副会長指名について説明があり、大槻純男理事、木村弥生理事が選ばれた。

② 監事の互選

- 足立会長より監事指名について説明があり、榊原陽一理事、肥後大輔理事が選ばれた。

(2) 各担当の役割分担について

① 教育担当について（主：松本俊英、副：小迫英尊、村岡賢）

・トレーニングコース

② IT・広報担当について（主：松本雅記、副：紀藤圭治、奥田修二郎）

・J-STAGE 登録

・会員管理システム

・HP

③ 大会担当について（大槻純男）

・大会運営の引継ぎ

④ 学術担当について（主：太田信哉、副：川村猛）

・他学会、分子生物学会のセッションなど

⑤ 国際・イニシアティブ担当について（主：石濱泰、副：植田幸嗣、武森信暁）

・HUPO AOHUPO との窓口、Presentation Awards、外国からの Webinar、イニシアティブ申

請窓口など

⑥ 学会誌担当について（主：武森信暁、副：植田幸嗣、久野敦）

・Proteome Letters、JPDM、など

⑦会計担当（主：三城(佐藤)恵美、副：杉山直幸）

・会計のオンライン同期化：会計事務所から提案された会計ソフト freee を使用していきたい。口座を同期すると、会計事務所は決算作業の早期化が期待できる上、登録したメンバー（3名まで）は内容を把握することができる。追加の費用不要。利用する場合は、ルール作りが大切とのこと。

口座の種類：JPrOS 事務局、奇数年度大会、偶数年度大会、科研費、（ASJ ペイメント）

⑧庶務担当（主：川島、副：今見、吉川、阿部）

- 足立会長より各担当について説明があった。新・旧担当の対応付けファイルも作成した旨、説明があった。対応表は本項目下部に転記した。
- 足立会長より、旧・広報担当から IT・広報担当に変更した理由について説明があった。
- 会計担当（三城）より、会計ソフト freee への移行について説明があった。会計ソフト freee をつかうことで会計事務所との情報共有がスムーズになるとのこと。既存のエクセルベースの管理簿も残す。

		日本プロテオーム学会 第6期 2024-2025年		日本プロテオーム学 会 第7期 2026-2027年		
会長		松本雅記	会長	足立淳		
副会長		足立淳	副会長	木村弥生		
		近藤格		大槻純男		
庶務委員	主	増田豪	庶務委員	川島祐介		
	副	足達俊吾		副	今見考志	
木村弥生		吉川治孝				
会計委員	主	荒川憲昭		会計委員	阿部雄一	
	副	三城恵美	主		三城(佐藤)恵美	
会計一般			副		杉山直幸	
広報委員	主	河野信	IT-広報委員		主	松本雅記
	副	田中恒平		副	奥田修二郎	
学会誌編集委員	主	武森信暁			学会誌編集委員	主
	副	小林大樹	副	植田幸嗣		
		渡辺栄一郎		久野敦		
学術企画委員	主	岩崎未央	学術企画委員	主	太田信哉	
	副	太田信哉		副	川村猛	
		野口玲			主	石濱泰
学術活性化委員	主	小寺義男	国際連携・イニシアチブサポート委員	副	植田幸嗣	
	副	植田幸嗣			武森信暁	
		石濱泰	大会(年会)委員	主	大槻純男	
		武森信暁		副		
国際委員	主	石濱泰	教育委員		主	松本俊英
	副	田中恒平		副		小迫英尊
		岩崎未央				村岡賢
大会(年会)委員	主	足立淳	監事		榊原陽一	
	副				肥後大輔	
教育委員	主	今見考志				
	副	松本俊英				
		阿部雄一				
監事*1	主	川上隆雄				
	副	榊原陽一				

*1 第6期より、主副の区別なし

6. 新理事・自己紹介(新理事)

- 当日現地参加した新理事・旧理事が一人ずつ自己紹介を行った

7. 前期理事からの引き継ぎ（引き継ぎ期間：2026年1月～3月）

（1）松本前会長より統括

- やり残した課題など、今後の学会運営について簡単にコメントいただいた。また名誉会員について、候補者と連絡がとれないことがあった。そのため候補者に該当する会員には定期的な連絡を心掛けた方がよいとの助言があった。

（2）他前理事からの引き継ぎコメント

- 特にコメントなし。

8. JPrOS2025 について（川島）

1) 参加者合計：468名

- 参加登録数 322名（会員 196名、学生 46名、名誉会員 1名、非会員 79名）
- 招待演者 30名
- 出展企業参加者 116名

2) 大会収支：収入 14,585,152円、支出 12,658,216円、収支 1,926,216円

※大会準備金 50万円と登録システム利用料 36.6万円に関して、まだ事務局通帳に送金しておりません。

- ### 3) 協賛企業数：50社（ランチョン・ナイトセミナー8社、企業展示 36社、広告 11社、寄付金 4社）
- ### 4) 一般演題：基調・特別講演 2、国際講演 4、受賞講演 1、指定演題 44、一般演題 24、ポスター演題 98

- JPrOS2025 大会について、川島理事から状況報告と、大会開催についての感謝の旨コメントがあった。また大会の収入と税金の関係についてコメントがあり、2025年大会の収支を踏まえた税金の試算額について、1,089,000円になる見込みとのこと。なお協賛金については1000万円以下に抑えるなど提案があった。山下賞・賞金について寄付金としての整理を会計事務所に報告した。

9. JPrOS2026 について（大槻）

日程：7/21（火）～7/23（木）

場所：熊本城ホール（熊本県熊本市）

大会長：大槻 純男（熊本大学）

- 大槻大会長より以下の報告があった。HP立上げや参加費支払い手続き設定を完了。公開に向けて対応を進めている。プログラム委員会は第2回を2月に開催予定。ブース・広告の申し込みは既にあり、寄付金の打診も数社からあった。3月末～4月頭に演題募集予定。くまもんの参加も交渉中。

10. JPrOS2027 について（小松）資料4

- 小松先生より学会運営に関して情報共有が行われた。会期は、2027年8月2-4日で、特に反対意見はなく承認された。学会会場は、福井駅そばの福井県民ホール・はぴりんホールを使

用予定。実行委員会として福井工業大学・福井県立大学に加えて学会員で構成予定。福井市から助成金補助があるが、福井市市内の宿泊客人数が重要なので、なるべく福井駅そばに泊まった方が良い。

11. 学会誌のOA化について (武森)

資料1参照

●武森先生から、オープンアクセス化にあたっての著作権について議論が挙げられた。結論としては、著作権は学会に帰属するというので、資料1に示す改訂案が承認された。

12. 報告、その他

(1) 教育担当 (トレーニングコース) 資料2参照

(2) 学術担当 資料3参照

(3) 次回の理事会

(4) 各担当での引継ぎ

●教育担当より、第13回トレーニングコースについて計画の報告があった。

●学術担当より、2025年度生化学会で行ったセッション報告と、2026年日本分子生物学・生化学合同大会で予定しているセッションについて報告があった。またHUP02026(シンガポール)について、座長・Key Note SpeakerのNominationについて募集があった。また日本蛋白質科学会との合同セッションにむけて、学会長間でのコミュニケーションを密に行うべきと指摘があった。

●国際担当から、JPrOSからのAOHUP0の理事推薦について依頼があった。また2029年のHUP0/AOHUP0について周知があり、日本がどのように対応するか(HUP0のみ承知/AOHUP0のみ承知/HUP0+AOHUP0共催/どちらも招致しない)をJPrOS内で早めに議論する必要あり。2027年ごろに動き始める必要ありそう。

13. JPDMについて

(1) JPDM編集委員、外部評価委員との兼任について

●石濱理事より、理事は基本的にJPDM編集委員、jPOST外部評価委員を兼ねることの確認が行われた。

●JPDMについて、目標70報のところ2025年度分の投稿数が伸び悩んでいる。2026年度以降の投稿数増加が必要と指摘があった。

資料1

「日本プロテオーム学会誌」投稿規程

「日本プロテオーム学会誌」（英名、「Proteome Letters」）（以下、本誌）は、日本プロテオーム学会が発行する和文のオープンアクセス誌で、日本プロテオーム学会編集委員会（以下、編集委員会）の責任のもと、プロテオミクス及びその関連分野の発展に寄与するために編集される。

1. 論文の種類

本誌掲載論文の種目は、下記の通りに区分する（別表1参照）。

- (1) 一般論文：独創性・新規性があり、かつ、価値ある事実あるいは結論を含む論文をいう。
- (2) 短報：断片的な研究ではあるが、新しい事実や価値のある結論を含む短い論文をいう。
- (3) 総合論文：著者のある主題に関する研究業績を、これまでに公表した数編の論文の内容を中心にとりまとめて体系化し、新たに執筆された論文をいう。
- (4) 総説：プロテオミクス及びそれに関連する分野の研究動向を総合的に、体系的に論じたものをいう。
- (5) テクニカルレポート：技術・方法・機器・試薬・プロトコル等の開発、改良等に関する知見やデータを報告する論文をいう。ただし、知見やデータが二次的情報であっても構われない。

（一般論文と短報は原著論文であり、総合論文、総説及びテクニカルレポートは総説型論文である。総説型論文の投稿は、原則として編集委員会の承認によるものとする。）

2. 投稿原稿の準備

投稿原稿の作成は下記によるものとする。

- (1) 投稿原稿は電子ファイルの提出を求めらるので、Microsoft のアプリケーション「Word」を用いて作成する（日本プロテオーム学会のホームページよりその雛形ファイルをダウンロードできる、テンプレートのダウンロード）。その印字形式は A4 判用紙 34 字 × 32 行とし、上下左右マージンをそれぞれ 30 mm 以上に設定する。原稿には通し番号（頁数）及び行番号を記す。投稿原稿は日本語で横書きとする。専門用語等を外国語で記す場合はアルファベットを用い、数字はアラビア数字を用いる。単位は SI 単位系（cm, mm, mg, g/dl, 37 °C...）を基本に用いる。
- (2) 投稿原稿の構成：原稿の構成は、①表紙、②和文要旨、③本文、④表、⑤図の表題と説明、⑥図、⑦英文要旨とキーワード、とする。ただし、論文の構成上、表または図がないものもあり得る。
- (3) ①表紙：論文の種目（一般論文、短報、総合論文、総説）、題名、著者名、研究の行われた機関名、同所在地、連絡代表者（著者名右肩に*印を付す）の E-mail アドレスを記載する。所属機関が複数あるときは、例えば、著者名の右肩に上付きで 1, 2, 3... と番号を付し、番号ごとの所属機関名をすべて記載する。
- (4) ②和文要旨：要旨は論文の要点を明示した 400 字程度のものとする。要旨内では改行しない。図、表、文献等は引用しない。
- (5) ③本文：原著論文の本文には、「1 序論」、「2 方法」、「3 結果」、「4 考察」、「文献」の項目を大見出しとして付けて記載する。必要に応じて「5 結論」や「謝辞」の項目を「文献」の前に加えることができる。また、「3 結果」と「4 考察」を組み合わせて、「3 結果と考察」とすることもできる。総説型論文の本文には、「2 方法」、「3 結果」、「4 考察」の項目を大見出しとして記載する必要はない。ただし、

「1 序論」, 「N 結論 (N は通し番号)」及び「文献」の項目の記載は必須とする。本文枚数の目安は次の通りである。ただし, 2.2) に示す④表及び⑥図は 1 点につき 0.3 枚として本文の枚数に含めて計算する。

- ・ 一般論文・テクニカルレポート 12 枚以内
- ・ 短報 6 枚以内
- ・ 総合論文・総説 25 枚以内

(規定以上に長い論文でも編集委員会で認めた場合に限って掲載することがある。)

- i. 本文中の大見出し, 中見出し, 小見出しは point system とし, 1, 2, 3..., 2-1, 2-2, 2-3..., 2-1-1, 2-1-2, 2-1-3...と記載する。原則として, 「1 序論」, 「N 結論 (N は通し番号)」には中見出し, 小見出しは記載しない。
- ii. 専門用語は「プロテオミクス辞典 (日本プロテオーム学会編)」(講談社)による。
- iii. 化合物名は原則として IUPAC 命名法に従い, 日本語で記載する。ただし, 元素記号及び簡単な無機化合物の化学式は用いてもよい。
- iv. 略語を要旨及び本文に用いる場合には, それぞれ初出の時点で定義する。その場合, 正式の名称の後に略語を () 内に付記する。題名, 要旨及び本文において定義をせずに用いることのできる略語を別表 2 に示す。
- v. 外国の人名, 会社名等は原則としてアルファベットで表記する。
- vi. 本文中に引用する人名は姓だけとし, アルファベットで表記する。敬称は付けない。著者が複数の場合, 第一著者の姓のみを引用し, その他は略して「・・・ら」で記す。
- vii. 図及び表を本文中で引用する場合は, Fig. 1, Table 1...と記載する。
- viii. 引用文献番号は本文中の出所順にその項目の右肩に上付きで¹⁾²⁾, または 3 件以上の文献を引用する場合は, ³⁾⁻⁵⁾のように通し番号を記載する。
- ix. 引用文献は本文の末尾に「文献」の項目でまとめて記載する。記載法は米国立医学図書館 (NLM) が刊行している”CITING MEDICINE, 2nd Edition The NLM Style Guide for Authors, Editors, and Publishers” (<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/books/NBK7256/>) に準拠することとする。

例 雑誌: 著者名 (全員) . 表題. 雑誌名. 西暦年号; 巻数: 初頁-終頁.

4) Kinoshita E, Kinoshita-Kikuta E, Koike T. Separation and detection of large phosphoproteins using Phos-tag SDS-PAGE. Nat Protoc. 2009;4:1513-1521.

4) 木下英司, 木下恵美子, 小池透. Phos-tag 電気泳動を用いた高分子量リン酸化タンパク質の質的・量的変動モニタリング. 生化学. 2010;82:857-862.

なお, 著者が 4 名以上の場合には, 筆頭著者 3 名を記した後, 「ら」(英語表記の場合は「*et al.*」) を付し, 以下の著者名を省略することができる。

4) Kinoshita E, Kinoshita-Kikuta E, Takiyama K, *et al.* Phosphate-binding tag, a new tool to visualize phosphorylated proteins. Mol Cell Proteomics. 2006;5:749-757.

4) 木下英司, 木下恵美子, 青木悠里ら. キナーゼプロファイリングのための新しいリン酸アフィニティー電気泳動法. 生物物理化学. 2007;51:199-206.

例 単行本: 和書, 洋書共に著者名 (全員) . 表題. 編者名 (全員) . 書名 (巻数版数) . 発行地名: 発行社名; 西暦年号. 頁数.

2) Kinoshita-Kikuta E, Kinoshita E, Koike T. Phos-tag technology for kinomics. In: Kraatz H-B, Martic S, editors. Kinomics: Approaches and applications. Weinheim: Wiley-VCH Verlag GmbH & Co. KGaA; 2015. p. 195-210.

2) 木下英司, 木下恵美子, 小池透. Phos-tag ゲルによるリン酸化タンパク質の分離・同定法. In: 中村和行, 西尾和人, 西村俊秀, 編. 臨床プロテオミクス バイオマーカー探索から個別化医療へ. 東京: 金原出版; 2012. p. 271-274.

(6) 表: 表は原則として英文で作成し, 本文とは独立させる。表には縦罫線を用いない。表題は表の上部に, 説明は表の下部にそれぞれ記載する。

(7) 図の表題と説明: 図の表題及び説明は原則として英文で作成し, 本文及び図とは独立させて, まとめて図の前に付ける。図を転載する場合は, その転載許可を著者において取得し, その旨を当該箇所に明記すること。例えば, 次の通りである。

Fig. 1 Schematic diagram of analytical system

1: DW; 2: EtOH; 3: MeOH; 4: DMSO. Reprinted with permission from Ref. 16 © (2014) Wiley-VCH Verlag GmbH & Co. KGaA, Weinheim.

日本プロテオーム学会は著者の無断転載等によって生じるすべての損害に関してその責を免れる。

- (8) 図：オンライン発行用の原図として不適当な場合は書き改めが求められることがある。図は英文で作成し、A4 判用紙の 1 頁に一つの図を貼り付ける。図の番号及び第一著者名を左下に記載する。カラー図も掲載可能である。
- (9) 英文要旨：英文要旨は本文と独立に理解できるように、本文中で定義した記号、略語等は改めて定義する。本文中の図、表、文献等は引用しない。英文要旨の構成は、①題名、②著者名（名が先、性は後、頭文字は大文字）、③連絡代表者の E-mail アドレス、④研究の行われた機関名（正式な英語名称を記載）、⑤英文要旨の本文（250 単語以内）、⑥キーワード（英文要旨の末尾に論文内容を的確に表すキーワード（5 個以内、キープレーズを含む）を英文で記載する（アルファベット順）。各キーワードをセミコロンで区切る。

記 載 例

Keywords: mass spectrometry; phosphoproteomics; phosphorylation; post-translational modification; two-dimensional electrophoresis.

3. 投 稿 に 際 し て の 注 意 事 項

原稿の投稿に際しての注意事項は下記の通りである。

- (1) 投稿原稿における研究については、ヘルシンキ宣言、実験動物の飼養及び保管等に関する基準（昭和 55 年 3 月、総理府告示第 6 号）、各機関、施設あるいは専門研究分野で定められた実験並びに研究指針及び基準等を遵守したものでなければならない。
- (2) 投稿原稿における研究内容に関して、本文「文献」の項目の直前に著者らの利益相反状態について開示、記載しなければならない。開示すべき利益相反状態が無い場合もその旨を記載するものとする。
- (3) 採否が決定するまで、投稿した論文と同一主旨の論文を他誌に投稿することは禁止する。また、他誌に投稿中の論文は受け付けられない。
- (4) 投稿資格として、日本プロテオーム学会の会員、非会員を問わない。
- (5) 投稿に当たって著者は 50,000 円を投稿料として負担する。ただし、第一著者、または連絡著者（corresponding author）が日本プロテオーム学会の会員、あるいは編集委員会より投稿依頼のあった著者の場合、その負担は免除される。
- (6) 原稿は、2.2) の①～⑦を一つの PDF ファイルとして、E-mail にて本誌編集事務局（proteomeletters@googlegroups.com）へ投稿すること。ただし、1 度のメール容量は 10 MB までに収めること。10 MB を超える場合は、編集事務局に相談すること。編集事務局の連絡先は上記のメールアドレス。
- (7) 原稿の受付月日（Received）及び受付番号は、E-mail で連絡著者に通知する。
- (8) 原稿の執筆、体裁、投稿、送付方法等に関し疑問のある場合、または原稿投稿後 10 日以内に受付通知がない場合には、上記の本誌編集事務局に問い合わせること。

4. 論文の審査

- (1) 論文の審査は学会誌に関する規定に従って編集委員会が行い、編集委員長は著者に審査結果を通知する。

- (2) 審査の結果改定を求められた論文が、結果通知後に再投稿された場合の改定原稿の最終受付日を改定稿受付月日 (Revised) とする。
- (3) 審査の結果掲載が決定された場合、編集委員長は著者に掲載決定を通知する。その通知日を受理受付月日 (Accepted) とする。
- (4) 受理された論文は、最終原稿 (Word で作成したファイル) と図 (カラー 300 dpi, グレースケール及び線画 600 dpi) の電子ファイルを上記の本誌編集事務局に提出する。
5. 校正及び正誤訂正
- (1) オンライン発行前の初校は著者、再校以後は編集委員会が行うことを原則とする。
- (2) 著者の初校は印刷上の誤り以外の訂正はできない。
- (3) オンライン発行後 6 ヶ月以内に著者からの訂正の申し出があった場合は、次のように取り扱われるものとする (7 ヶ月以上経過後の著者からの申し出は一切受け付けない)。
- b) 印刷上の誤りについては、その旨を記載した訂正文等を掲載する。
- b) 印刷上の誤り以外の訂正、追加等は一切認めない。
6. 著作権と掲載料等
- (1) 本誌は完全オープンアクセス誌であり、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスを使用する。本誌に掲載されることが決定した論文等の著作権は日本プロテオーム学会に帰属する。
- (2) 本誌に掲載される論文は、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利 4.0 国際ライセンス (CC BY-NC 4.0) の下で出版する。本ライセンスは、適切なクレジットを表示する限り、非営利目的における論文の共有、翻案その他の利用を許可するものである。
- (3) 掲載が決定された論文の掲載料等、編集、発行に必要な経費を請求することはない。ただし、別刷は希望者のみへの実費頒布とし、希望部数 (最小 50 部以上 10 部単位) を著者校正の際に所定の申込書で注文できる。

別表1 掲載論文の各種目分類の目安

論文種目	プロテオミクス及び関連分野の発展に寄与する	技術的に新しい、あるいは、技術の応用によって得られた結論に価値がある	データが完備している	データが断片的である	投稿	最大原稿枚数の目安 ^{*2}
一般論文	○	○	○		通常形式	12
短報	○	○		○	通常形式	6
総合論文	○	著者のある主題に関する研究業績をとりまとめて体系化したもの			編集委員会の承認 ^{*1}	25
総説	○	プロテオミクス及びそれに関連する分野の研究動向を総合的、体系的に論じたもの			編集委員会の承認 ^{*1}	25
テクニカルレポート	○	技術・方法・機器・試薬・プロトコル等の開発、改良等に関する知見やデータの報告			編集委員会の承認 ^{*1}	12

*1 通常の投稿も受け付けるが、その場合、編集委員会が認めたものに限る。

*2 「日本プロテオーム学会誌」投稿規定の2. 5) 参照。

別表2 題名、要旨及び本文に用いることのできる略語

AAS	atomic absorption spectrometry
ACES	2-[(2-amino-2-oxoethyl)amino] ethanesulfonic acid
ACN	acetonitrile
AES	auger electron spectrometry
amu	atomic mass unit
ANOVA	analysis of variance
APCI	atmospheric pressure chemical ionization

API	atmospheric pressure ionization
AUC	area under curve
BCIP	5-bromo-4-chloro-3-indolyl phosphate
Bis	<i>N,N'</i> -methylenebisacrylamide
bp	base pairs
BSA	bovine serum albumin
%C	cross-linking agent (g/100 mL)/%T
CAPS	3-(cyclohexylamino)-1-propanesulfonic acid
CBB	Coomassie Brilliant Blue
CCD	charge-coupled device
CE	capillary electrophoresis
CEC	capillary electrochromatography
CFE	continuous flow electrophoresis
CHAPS	3-[(3-cholamidopropyl)dimethylammonio]-1-propanesulfonate
CHCA	<i>o</i> -cyano-4-hydroxycinnamic acid
CHES	2-(<i>N</i> -cyclohexylamino)ethane sulfonic acid
CID	collision-induced dissociation
CIEF	capillary isoelectric focusing
CMC	critical micelle concentration
Con A	Concanavalin A
CNS	central nervous system
cpm	counts per minute
CTAB	cetyltrimethylammonium bromide
CTL	cytotoxic T lymphocyte
CV	coefficient of variation
CZE	capillary zone electrophoresis
1D	one-dimensional
2D	two-dimensional
Da	dalton (molecular mass)
DAPI	4',6-diamidino-2-phenylindole
2DE	two-dimensional gel electrophoresis
DIGE	fluorescence difference gel electrophoresis
DGGE	denaturing gradient gel electrophoresis
DHB	dihydroxybenzoic acid
DMEM	Dulbecco's modified Eagle medium
DMF	<i>N,N</i> -dimethylformamide
DMSO	dimethyl sulfoxide
DNA	deoxyribonucleic acid
DTT	dithiothreitol
ECD	electron capture dissociation
ECL	enhanced chemiluminescence
EDTA	ethylenediaminetetraacetic acid
EEO	electroendosmosis
EGTA	ethylene glycol- <i>bis</i> (β -aminoethylether)- <i>N,N,N',N'</i> -tetraacetic acid
EKC	electrokinetic chromatography
ELISA	enzyme-linked immunosorbent assay
EOF	electroosmotic flow
ER	endoplasmic reticulum

ESR	electron spin resonance
ESI	electrospray ionization
EST	expressed sequence tag
eV	electron volt
FAB	fast atomic bombardment
FBS	fetal bovine serum
FCS	fetal calf serum
FDR	false discovery rate
FACS	fluorescence-activated cell sorting
FITC	fluorescein isothiocyanate
FRET	fluorescence resonance energy transfer
FT-ICR	fourier transform-ion cyclotron resonance
FT-IR	fourier transform-infrared spectrometry
GC	gas chromatography
GIF	graphic interchange format
GO	Gene Ontology
GRAVY	grand average of hydrophobicity
GSH	glutathione
GST	glutathione-S-transferase
H&E	hematoxylin and eosin
HEPES	<i>N</i> -(2-hydroxyethyl)piperazine-2'-(2-ethanesulfonic acid)
HPCE	high-performance capillary electrophoresis
HPLC	high-performance liquid chromatography
HRP	horseradish peroxidase
HSA	human serum albumin
HSP	heat shock protein
HTML	hypertext mark-up language
HUPO	Human Proteome Organisation
ICAT	isotope-coded affinity tag
ICP	inductively coupled plasma
ICR	ion cyclotron resonance
id	inside diameter
IEF	isoelectric focusing
Ig	immunoglobulin
IMAC	immobilized metal affinity chromatography
IP	immunoprecipitation
IPG	immobilized pH gradient
IPI	international protein index
IPTG	isopropyl-b-D-thiogalactopyranoside
IR	infrared spectrometry
IRB	institutional review board
ITMS	ion trap mass spectrometry
iTRAQ	isobaric tag for relative and absolute quantitation
JHUPO	Japanese Human Proteome Organisation
JPrOS	Japanese Proteomics Society
kbp	kilobase pairs
kDa	kilodalton (molecular mass)
LC	liquid chromatography

LED	light-emitting diode
LOD	limit of detection
LOQ	limit of quantitation
mAb	monoclonal antibody
MACS	magnetic-activated cell separation
MALDI-MS	matrix-assisted laser desorption/ionization-mass spectrometry
Mbp	megabase pairs
MES	2-(<i>N</i> -morpholino)ethanesulfonic acid
MHC	major histocompatibility complex
MOPS	3-(<i>N</i> -morpholino)propanesulfonic acid
M_r	relative molecular mass (dimensionless)
MRM	multiple-reaction monitoring
MS	mass spectrometry
MS/MS	tandem mass spectrometry
MudPIT	multidimensional protein identification technology
m/z	mass-to-charge ratio
NBT	nitroblue tetrazolium
NEPHGE	nonequilibrium pH gradient electrophoresis
NIH	National Institutes of Health
NMR	nuclear magnetic resonance
NP-40	Nonidet P-40
od	outside diameter
OD	optical density
ORF	open reading frame
PAGE	polyacrylamide gel electrophoresis
PBMC	peripheral blood mononuclear cell
PBS	phosphate-buffered saline
PCA	principal components analysis
PCR	polymerase chain reaction
PEG	polyethylene glycol
PFU	plaque-forming units
pI	isoelectric point
PMF	peptide mass fingerprinting
PMSF	phenylmethylsulfonyl fluoride
PMT	photomultiplier tube
PRIDE	PRoteomics IDentifications database
PRM	parallel reaction monitoring
PSD	post-source decay
PTFE	polytetrafluoroethylene
PTM	post-translational modification
PVA	polyvinyl alcohol
PVDF	polyvinylidene difluoride
PVP	polyvinylpyrrolidone
QCM	quartz crystal microbalance
Q-TOF	quadrupole time-of-flight
RNA	ribonucleic acid
RNA-Seq	next generation RNA sequencing
RIA	radioimmunoassay

ROC	receiver operating characteristic
ROS	reactive oxygen species
RP	reversed phase
rpm	revolutions per minute
RT-PCR	reverse transcriptase-PCR
SCX	strong cation exchange
SD	standard deviation
SDS	sodium dodecyl sulfate
SEC	size-exclusion chromatography
SELDI	surface-enhanced laser desorption/ionization
SEM	standard error of the mean
SILAC	stable isotope labelling with amino acids in cell culture
SIM	selected ion monitoring
S/N	signal-to-noise ratio
SPE	solid-phase extraction
SPR	surface plasmon resonance
SSCP	single-strand conformation polymorphism
ssDNA	single-stranded DNA
SRM	selected-reaction monitoring
%T	total gel concentration (acrylamide plus cross-linking agent; g/100mL)
TBS	Tris-buffered saline
TEMED	<i>N,N,N',N'</i> -tetramethylethylenediamine
TFA	trifluoroacetic acid
THF	tetrahydrofuran
TIC	total ion current
TLC	thin-layer chromatography
TOF	time of flight
Tris	tris(hydroxymethyl)aminomethane
URL	uniform resource locator
UV	ultraviolet

資料2

教育担当(トレーニングコース)

日本プロテオーム学会員の皆様

平素は日本プロテオーム学会にご支援・ご協力いただきありがとうございます。

この度、日本プロテオーム学会教育委員主催の第13回プロテオミクス・トレーニングコース(2026年3月9日(月)、10日(火))を下記の通り開催することとなりましたのでお知らせいたします。今回は、『伝授します! FFPE 検体を用いたプロテオミクスとデータ解析』をコンセプトに、臨床病理検体を主軸に置いた網羅的マーカー探索法を行い、より簡便に各研究室で立ち上げることのできる手法とその自立支援を目指した企画です。

申し込み締め切りは 2026年1月30日(金) です。

参加希望者は、下記の参加フォームに必要事項を記載のうえお送りください。

なお、会員・非会員は問いませんので、添付書類を興味のある非会員の方にも転送してお誘いいただければ幸いです。

年度末の開催で申し訳ございませんが、皆様のご参加をお待ちしております。

日本プロテオーム学会教育委員 今見考志、阿部雄一、松本俊英

第13回プロテオミクス・トレーニングコース『伝授します! FFPE 検体を用いたプロテオミクスとデータ解析』

【日時】

2026年3月9日(月) 13:00 ~ 2026年3月10日(火) 15:00 頃

【会場】

北里大学相模原キャンパス A1号館

252-0373 神奈川県相模原市北里 1-15-1

URL : <https://www.kitasato-u.ac.jp/jp/campus-guide/sagamihara.html>

宿泊される方は、北里大学前(パラディスイン相模原)、相模大野駅または町田駅周辺をお勧めします。

【トレーニング対象者】

FFPE 検体をお持ちでプロテオーム解析を実施してみたい方、今後 FFPE 検体を取得予定の方など(大学院生やプロテオーム解析をしたことない方大歓迎です)。

【トレーニングの概要（予定）】

FFPE 検体からタンパク質を抽出し、質量分析用試料として調整する。さらに、質量分析装置の見学と最新の抽出方法について学ぶ（実習・講義）

Perseus を用いたデータ解析法（散布図、volcano plot、ヒートマップ、主成分分析またはそれに付随する統計解析）や jPOST 活用法の紹介（講義・実習）

空間オミクス解析の概要（講義）・リン酸化プロテオーム解析の実際（講義）

【事前準備】

自身の PC（Windows11 推奨）

受講前までに以下のソフトを自身の PC にインストールしておいてください。

Perseus: <https://maxquant.net/perseus/> (Windows10/11 のみになります)。

.NET Framework 4.7.2 or higher: <https://www.microsoft.com/en-us/download/details.aspx?id=30653>

トレーニングは Windows PC を用いて進行します。Perseus は Window のみで Mac 等では動作できないことをご了承ください。

【参加費】

個人会員（法人登録含む） 2万円

学生会員 3千円

その他（一般） 4万円

その他（学生） 1万円

【受講人数】

12名

【参加申し込み方法】

参加申込書フォーム (<https://forms.gle/AQ1ERG1zHk3SZ9jCA>) に記載の上、送信下さい。

応募締め切り：2026年1月30日（金）

参加当確は2月13日（金）までに e-mail で連絡します。

問合せ先：松本 俊英（北里大学）

E-mail: matsumoto@med.kitasato-u.ac.jp

資料3

学術企画担当

2025年度生化学会

会期：2025年11月3～5日

会場：国立京都国際会館

1. シンポジウム：公募シンポジウム
2. 研究分野：11: 新領域・新技術
3. テーマ名

プロテオーム解析技術が拓く新しい生命現象

Proteomics technology unlocks new biological systems

4. オーガナイザー氏名・所属

代表：今見 考志・理化学研究所

共同：太田 信哉・北海道大学遺伝病制御研究所

5. 概要 200文字程度（日本語）

近年のプロテオーム解析技術の進歩によって、単純なタンパク質の発現量解析のみならず、リン酸化や糖鎖などの翻訳後修飾を受けたタンパク質の解析、タンパク質局在や相互作用解析などを簡便に網羅的に行えるようになった。本セッションでは、細胞内の各種の分子機構解明に対して、プロテオーム解析技術がどのように使用されているかという点に焦点をあて、主にプロテオミクス研究者による研究例を紹介する。

6. 演者の氏名・所属（2時間, 5名, 24分/人）

n 大槻先生 熊本大学

n 松本雅記 新潟大学

n 足立淳 医薬基盤・健康・栄養研究所

n 太田信哉 北海道大学 遺伝子病制御研究所

n 富岡中井郁那 京都大学 京都大学大学院薬学研究科

およそ50-100人が参加する会となった。質疑応答も盛り上がった。



2026 年 日本分子生物学・生化学合同大会

会期：2026 年 12 月 1～4 日

会場：パシフィコ横浜

ミニシンポジウム (90 分)

開催日時：未定

7. テーマ名 (日英どちらでも可)

正確な定量が変える生命科学：プロテオミクスの現在と未来

The Present and Future of Proteomics:

Proteome-wide Accurate Quantification Transforming Life Sciences

8. オーガナイザー氏名・所属

小松 節子・福井工業大学、太田 信哉・北海道大学

9. 日本語概要 (全角 200 文字程度)

生命現象を分子レベルで理解するためには、分子の同定に加えて、その量的変動を正確に捉えることが不可欠である。特にタンパク質は多層的な制御を受けるため、mRNA 量のみから機能状態を推定することには本質的な限界がある。このような背景のもと、プロテオームスケールでの正確な定量は、生命科学における重要な基盤となりつつある。

本セッションでは、プロテオミクスにおける正確な定量技術を起点として、それらが生命現象の理解をどのように刷新し、今後の生命科学をどこへ導くのかを議論する。特に、内部標準を用いた絶対定量法や高再現性を担保する測定・解析基盤など、プロテオミクスだからこそ可能となった定量戦略に焦点を当てる。

10. 英語概要 (半角 400 文字程度)

Understanding biology at the molecular level requires precise quantification and molecular identification. Given that proteins are subject to multilayered regulation, their functional states cannot be deduced solely from mRNA levels. Consequently, precise proteome-wide quantification has emerged as a fundamental aspect of life sciences. This session underscores how accurate quantitative proteomics, facilitated by methodologies such as absolute quantification with internal standards and highly reproducible measurement infrastructures, is transforming biological understanding and delineating future trajectories in life science research.

11. 予定演者の氏名・所属 (4-5 名)

n 武森 信暁・愛媛大学

n 清水 義宏・理化学研究所

n 幡野 敦・新潟大学

* 本大会では口頭発表の選出はできない。

ジェンダーの偏りをなくすこと：女性演者 (可能なら 2 名：30%以上) を入れないと厳しい。

しかし、これまでの企画も女性演者の選考に難航している。

過去 2 年の学術企画の女性演者に関して

2024

第47回日本分子生物学会ニシンポジウム

疾患に關与する宿主と腸内細菌叢の相互作用研究

発表者計4名うち女性2名

1. 渡辺 栄一郎 (群馬県立小児医療センター)
- 2. 高安 伶奈 (コーネル大)**
3. 須田 亙 (理研)
- 4. 宮島 伶奈 (口頭発表選出, 慶應義塾大)**

2025

第25回日本蛋白質科学会年会 ワークショップ

細胞制御機構の包括的理解のためのプロテオーム解析技術

発表者計6名うち女性1名

1. 丹羽 達也 (東京科学大)
- 2. 白石 千瑛 (名古屋大学)**
3. 川島 祐介 (かずさDNA研究所)
4. 河野 信 (北里大学)
5. 小谷 典弘 (埼玉医科大)
6. 澤崎 達也 (愛媛大学)

2025

第98回日本生化学会大会 シンポジウム

プロテオーム解析技術が拓く新しい生命現象

発表者計5名うち女性1名

1. 大槻 純男 (熊本大)
2. 松本 雅記 (新潟大学)
3. 足立 淳 (医薬基盤・健康・栄養研究所)
4. 太田 信哉 (北海道大)
- 5. 富岡 中井 郁那 (京都大)**

また岩崎理事(第6期)がHUP0 2026 Singaporeで担当する座長を募集中とのこと。日本プロテオーム学会から数名の座長候補リストを提出。

資料4

開催案

大会名: 日本プロテオーム学会2027年大会
 会期: 2027年8月2日(月)ー4日(水)
 場所: 福井県福井市

予定会場: メイン会場: 福井県民ホール(AOSSA8F)
 分科会会場: 地域交流プラザ(AOSSA6F)
 〒910-0858 福井市手寄1-4-1 AOSSA
 ポスターセッション&企業展示: にぎわい交流施設(ハピリンホール)
 懇親会会場: ホテルフジタ福井

主催: 日本プロテオーム学会
 大会長: 小松節子(福井工業大学)
 副大会長: 安達淳(医薬基盤・健康・栄養研究所)

実行委員会

福井工業大学: 3名
 福井県立大学: 3名
 学会関係者: 5名(?)

プログラム委員会

予定参加人数: 300名(?)
 企業展示: 20ー25件(?)
 ポスター: 100件(?)

福井県コンベンション開催支援へ申請予定
 コンベンション開催助成金
 アトラクション助成金



AOSSA: 福井駅から1分
 AOSSA&ハピリン間: 徒歩2分
 駅を挟んで東と西: 雨にぬれず移動可能



懇親会場: ホテルフジタ福井
 福井駅から徒歩: : 10ー15分
 福井駅から路面電車: : 5分

4 福井県県民ホール (AOSSA8F)



〒910-0858 福井市手寄1丁目4-1(アオッサ 8F)
 TEL (0776)87-0003 FAX (0776)87-0303
<https://www.kenminhall-fukui.jp/>

●アクセス

徒歩/JR福井駅東口より1分

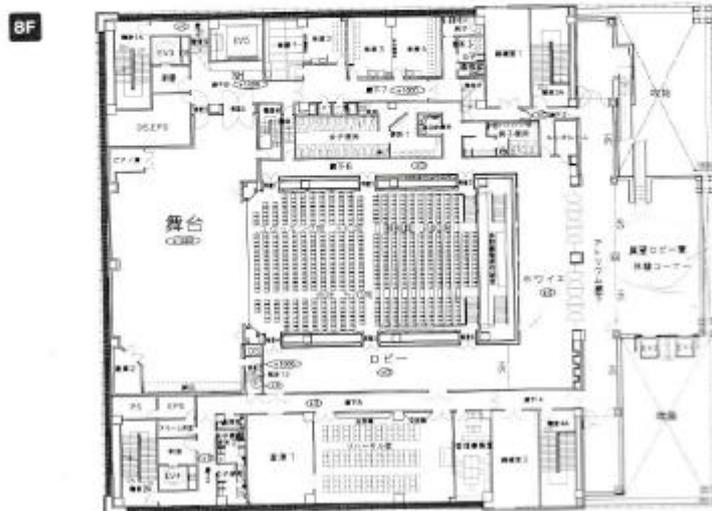


- 休館日 12月30日～1月3日 ※設備保守点検のため、臨時休館あり
- 利用時間 9:00～22:00 ※準備及び後片付けの時間も含む
- 利用受付 方 法/直接、管理事務所へ来館の上「利用許可申請書」(Fax、メールでも可)を提出
開始日/利用月の12ヵ月前から利用日の30日前まで申込可能
- 近隣MICE施設 AOSSA、ハビリン
- 近隣主要宿泊施設 ホテルルートイン福井駅前、東横イン福井駅前、福井マンテンホテル駅前 他多数
- 設置・撤去 原状からの変更は主催者が実施
- 特記事項 キッズルーム併設(部屋と簡単な備品のみ提供可能、託児要員は主催者が手配)
同時通訳設備、仮設ブース持ち込み可能

- P** アオッサ地下駐車場
169台・有料
※AOSSA内他施設と併用
- 🍴** ハビリン内飲食施設、アオッサ
内飲食施設、駅前周辺飲食街
等多数
- 📶** Wi-Fi あり
- 📶** LAN あり
- 🔊** 音響設備完備、プロジェクター・
スクリーン(300インチ)完備

会場名	階	面積(㎡)	間口×奥行 (㎡)	天井高(㎡)	収容能力(人)						備考
					固定席	スクール	レクチャー	アイナー (円席)	ビジネス (0.90)	その他	
ホール	8	381	25×15	10	240	210	535	240	273	—	舞台 30.8、37㎡(奥行約12.9m、間口幅約13.4m、間口高約7.2m)、昇降装置500kg/m ² 階段両側同時は飲食不可(パーティ対応)バントリーがないため、要相談
楽屋1	8	22	3.7×6	2.7	—	—	—	—	—	—	楽屋1・2で合休使用可能
楽屋2	8	20	4.4×4.5	2.7	—	—	—	—	—	—	楽屋1・2で合休使用可能
楽屋3	8	26	4.4×6	2.7	—	—	—	—	—	—	楽屋3・4で合休使用可能
楽屋4	8	30	5×6	2.7	—	—	—	—	—	—	楽屋3・4で合休使用可能
リハーサル室	8	138	14×9.9	4	—	72	100	—	60	—	展示会・ポスター展示など開催可能。パーティ対応バントリーがないため、要相談
ホワイエ	8	136	25.5×5.4	7	—	—	—	—	—	—	受付やパネル展、展示会場としても使用可能
ロビー	8	127	4.9×26	4	—	—	—	—	—	—	パネル展や展示会場としても使用可能

●主要会場図面



福井市地域交流プラザ (AOSSA5・6F)

〒910-0858 福井市手寄1丁目4-1 (アオッサ5F・6F)
 TEL (0776)20-1535 FAX (0776)20-1536
<http://www.city.fukui.lg.jp/kyoiku/gakusyu/sgakusyu/kouryuutop.html>
 メールアドレス:kouryu-plaza@city.fukui.lg.jp

●アクセス

徒歩/JR福井駅東口より1分



- 休館日 12月29日～1月3日
- 利用時間 9:00～22:00(ご利用申し込みは21時まで)
- 利用受付 方法/窓口受付、電話、ネット、FAX、メール
開始日/利用する日の属する月の6ヵ月前の月の2日から(1月は5日から)
※大規模な開催で日程を事前に決める必要がある場合はご相談ください
- 近隣MICE施設 AOSSA、ハビリン
- 近隣主要宿泊施設 ホテルルートイン福井駅前、東横イン福井駅前、福井マンテンホテル駅前 他多数
- 設備・撤去 現況貸し、撤去は主催者にて実施
- 特記事項 音響設備:マイク(有線)、ハンド型マイク(無線)、タイピン型マイク(無線)の貸出あり(有料)
映像設備:ビデオプロジェクター、スタンドスクリーン、高画力カメラ(マルチメディアビューワー)の貸出あり(有料)、テレビセット(TV、DVDデッキ)、ビデオデッキは無料貸出

- P** 169台・有料
※AOSSA内他施設と併用
- ハビリン内飲食施設、アオッサ内飲食施設、駅前周辺飲食街等多数
- Wi-Fi あり
- LAN あり
- 音響・映像設備 (詳細は特記事項にて)

会場名	階	面積 (㎡)	開口 × 奥行 (㎡)	天井高 (m)	収容能力 (A)						備考
					固定席	スクール	シアター	ディナー (円席)	ビュッフェ (立席)	その他	
会議室 501	5	87	—	3	24	—	—	—	—	—	
応接室 1	5	29	—	3	—	—	—	—	—	椅子7	
応接室 2	5	24	—	3	—	—	—	—	—	椅子5	
研修室 601A	6	90	9.7×8.5	3	—	54	—	—	—	—	
研修室 601B	6	90	9.7×8.5	3	—	54	—	—	—	—	
研修室 601C	6	90	9.7×8.5	3	—	54	—	—	—	—	
研修室 601ABC	6	270	9.7×25.2	3	—	162	—	—	—	—	
研修室 602	6	67	7.9×8.2	3	—	45	—	—	—	—	
研修室 603	6	70	8.2×8.2	3	—	45	—	—	—	—	
研修室 604	6	36	4.3×8.2	3	—	20	—	—	—	—	
研修室 605	6	54	6.4×9.7	3	—	36	—	—	—	—	
研修室 606	6	60	6.1×9.7	3	—	27	—	—	—	—	
研修室 607(OAフロア)	6	130	8.4×13.7	3	—	81	—	—	—	—	
調理実習室(土足新築)	6	127	9.8×14.1	3	—	36	—	—	—	—	
工作実習室	6	127	8.8×14.7	3	—	36	—	—	—	—	
研修室608	6	60	6.2×9.7	3	—	27	—	—	—	—	
和室 A[あじさい]	6	21畳	6.3×8.6	3	—	—	—	—	—	—	和室21名
和室 B[さくら]	6	28畳	8.1×8.6	3	—	—	—	—	—	—	和室28名
和室 A・B	6	49畳	14.4×8.6	3	—	—	—	—	—	—	和室49名
レクリエーションルームA	6	186	10.5×17.2	3	—	—	—	—	—	—	フローリング
レクリエーションルームB	6	94	5.0×17.2	3	—	—	—	—	—	—	フローリング
レクリエーションルームA・B	6	280	15.5×17.2	3	—	180	—	—	—	—	フローリング
講師控室	6	18	2.8×6.5	3	—	—	—	—	—	椅子4	

●主要会場図面



ダイアグラム

AI 生成コンテンツは誤りを
含む可能性があります。

ぎわい交流施設 (3・4F)

2-1 (JR福井駅西口「ハビリン」内)

TEL (0776)20-2901
http://nijwai.tmo.co.jp/



●アクセス

- 鉄 道/JR福井駅東口より徒歩1分
- バ ス/JR福井駅停留所より徒歩1分
- 自動車/北陸自動車道「福井IC」より車で15分

●休館日 年中無休

●利用時間 9:00～22:00 (受付時間 9:00～19:00)

●利用受付 開始日/利用希望日の1年前の月の最初の平日より可能

●近隣MICE施設 AOSSA 他多数

●近隣主要宿泊施設 ホテルルートイン福井駅前、東横イン福井駅前、
福井マンテンホテル駅前 他多数

●設営・撤去 主催者にて実施

●特記事項 googleストリートビュー ハビテラス <https://goo.gl/maps/TLhoMk7qWLbaMyr3A>
ハビリンホール <https://goo.gl/maps/1aUPFL1B5Xc>
ハビリンホール: 音響設備完備、ワイヤレスマイク・スピーカー貸出(有料)、
常設のプロジェクター貸出(有料)

P 75台・有料

ハビリン内飲食施設、アオッサ
内飲食施設、駅前周辺飲食街
等多数

あり(ハビリンホール、
リハーサル室)

あり(ハビリンホール)

音響・映像設備
(詳細は特記事項にて)

会場名	階	面積 (㎡)	間口 × 奥行 (m)	天井高 (m)	収容能力 (人)					備考	
					固定席	スタール	ステージ	アイオー (9席)	ビュッフェ (100席)		その他
◎ ハビリンホール	3	420	19.3×21.5	8	—	198	240	120	—	—	舞台を除いた面積。可動式椅子が出ている場合は部長不可パーティ可能
楽屋 A・B	3	12	3.6×3.3	—	—	—	—	—	—	—	洋室。土足不可。諸室単体での貸し出し不可
楽屋 C・D	4	11	3.3×3.3	—	—	—	—	—	—	—	洋室。諸室単体での貸し出し不可
楽屋 E	4	16	5×3.3	—	—	—	—	—	—	—	洋室・応接仕様。諸室単体での貸し出し不可
和室 A	3	12	3.7×3.3	—	—	—	—	—	—	—	和室5畳。土足不可。諸室単体での貸し出し不可
和室 B	3	25	7.6×3.3	—	—	—	—	—	—	—	和室12畳。土足不可。諸室単体での貸し出し不可
シャワー室 A・B	4	7	2.1×3.3	—	—	—	—	—	—	—	—
伝統芸能練習室	3	69	11.2×6.2	—	—	—	—	—	—	—	土足不可。飲食不可
リハーサル室	4	96	14.9×6.6	—	—	—	—	—	—	—	片直観望り。ピアノ完設
パントリー	3	12	2×6.2	—	—	—	—	—	—	—	水道設備(給湯不可)・業務用冷蔵庫・電卓調理設備
ハビテラス	1	630	—	—	—	—	—	—	—	—	全天候型広場

●主要会場図面

3F ハビリンホール



1F ハビテラス

